

一萬石園芳画

曲亭五郎著

芳名与美  
八大傳之  
三編

納奉  
文海堂

下冊

上冊

特別  
~13  
4271  
44

特別  
~13  
4271  
43







芳名与美  
八大侍之  
三編

上  
冊

特別  
~13  
4271  
43



213  
4271  
90

曲より其を記  
一需る國芳画  
やま女史

假名与み

犬傳

二十と編

上冊

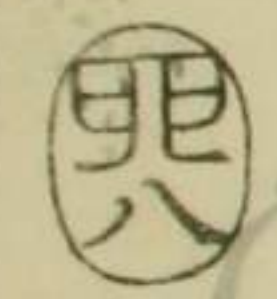


91-2286



櫻花紅葉成双に画をし讃は賀茂季鷹ぬしと双べう系  
よりいづれ後やもは縁せむ百年は夢のやせの秋と海れう  
年々歳々出板の合奏は花同くうづ。吾野は櫻花童田  
の紅葉一所よせたる大江戸の花は海繪の摺牙標印。  
作意の井味は實は縁は何れ疎もあき中よ不佞がこれ  
深山木々月夜歡び一見には味は花はけん実も無れど有聲  
よのこは祖父の色香はなうて耕は此合奏。実の生る木こそ  
花より知れやうとよあひはる入が大事と朝ふたふと怠慢と  
優曇華十五の花咲く春の夜。影もも鳴呼のこづなうなる

安政三丙辰年春吉日新板



曲亭琴童誌

八傳廿三編











うらひにくものりぬふ  
うちのきざさみひやう  
まわらふまゝごひて  
片貝をさぐて  
しそだなりその  
ときちの井  
るふいけ  
ざりとゞ六  
あま八を  
いづれめ  
さるま  
さふ  
ひやうふ  
ひやう  
そのがも  
平ふ  
いそぎ  
なごみ  
まちめて  
日へは  
たり


かくてさうめ小文  
吾のかゆこのん  
せんあえのりぬのを  
たちいぞとりののつくりのちやく  
まよふいさふつりり大家  
のうろうみてせりたてこころ

[illegible]



そのとたつりより  
 うらわめめだんそ  
 のわさあな  
 あうさあ  
 うやうやう  
 二天士よりち  
 むうひてと  
 のさうなまど  
 子ぎぎや  
 うらこらこい  
 ところう  
 いぞやそのいを  
 とさあめさん  
 なまめさね  
 そめくうさ  
 ぶさるさう  
 ふあうの  
 あんいれ  
 あうさ  
 こえ  
 びうの  
 大と  
 ざんの  
 あんち  
 あんち  
 いちの

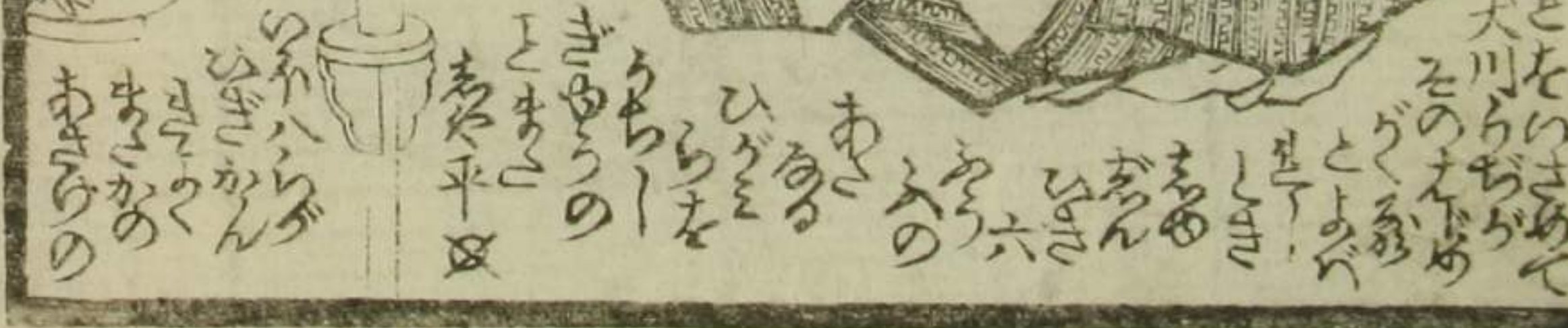
大石のうらなひ  
めあはさきと  
大つどろくと  
さそりまこ  
そのつぎの  
ちんいれと  
あるぐふ  
りえなる  
千葉のまじり  
よりよめの  
おくごうて  
むどのところへ  
いぬるぞうり  
りやうふらん  
ふこのうち大の  
千をゆくらげと  
なごたはらへ



おのゝ  
おのゝ太



▲むととあの家りあうとて  
武々ぬうやうさうとて、せよ  
と天ととて、其のそと  
ぐ、ふをせしを  
これのひとせしを▲









分但廿三



よりて甘きをうけま三つひのきくも  
あつて

This is a black and white woodblock print illustration, likely from a Japanese kabuki play. The scene depicts five actors in elaborate, patterned costumes and headgear. The actors are arranged in a dynamic, overlapping composition. The background is filled with stylized, swirling cloud patterns. In the bottom right corner, there is handwritten Japanese text in kuzushiji script.

也馬加  
一家けり  
つゞ







八十七卷

つぎに、ちやうどおのゝ  
久しうして、またみ  
そのぎをあらひて、  
うぐいしの戸つきのふ  
しろえきとく  
かのつと人を  
しらせよとのひ  
つけいさげ  
わごゆるく  
ふびぶらん  
ふいのあうん  
いまあそらく  
そふありて  
つゆりぐ  
まつのを  
まあちうー  
とでめね  
かりてきかう  
あると一  
れらふひ  
つけにちやさん  
とこへ入る人  
りてのたう大々  
あうざりなり  
くるとさうふ  
ひきの戸つきのが  
つふふうなるぬ  
まわり一のまのふ

たよ  
よ  
を  
な  
を

▲まだとちんまゝなるうみ  
平ふくせゝを大刀自断せしむ  
ちぢけつめりうきぬふ  
うひつけくるさうぬ  
小ふん五日を

あふくさつみをさ  
そんよりこの  
あんでのうんゆをう  
あなぞありぞたなる  
そとたえびうの



△さきさきうべを  
どうんぬいせんと  
いへくおとを  
いへくおとを  
いへくおとを  
いへくおとを

んのか  
あけ  
つを  
く  
そ  
が  
のま  
その  
う  
べを  
と  
よ  
あ  
を

ふさぬえりまひさゝあの  
あちごみ名ごころちうざ  
の人ごうごうのよちのへ  
やなちうごうのそぢのう人を  
六ッセウハツの土とけいのきを

お前さん  
りやうめん  
はるふちやう  
よくつるやうに

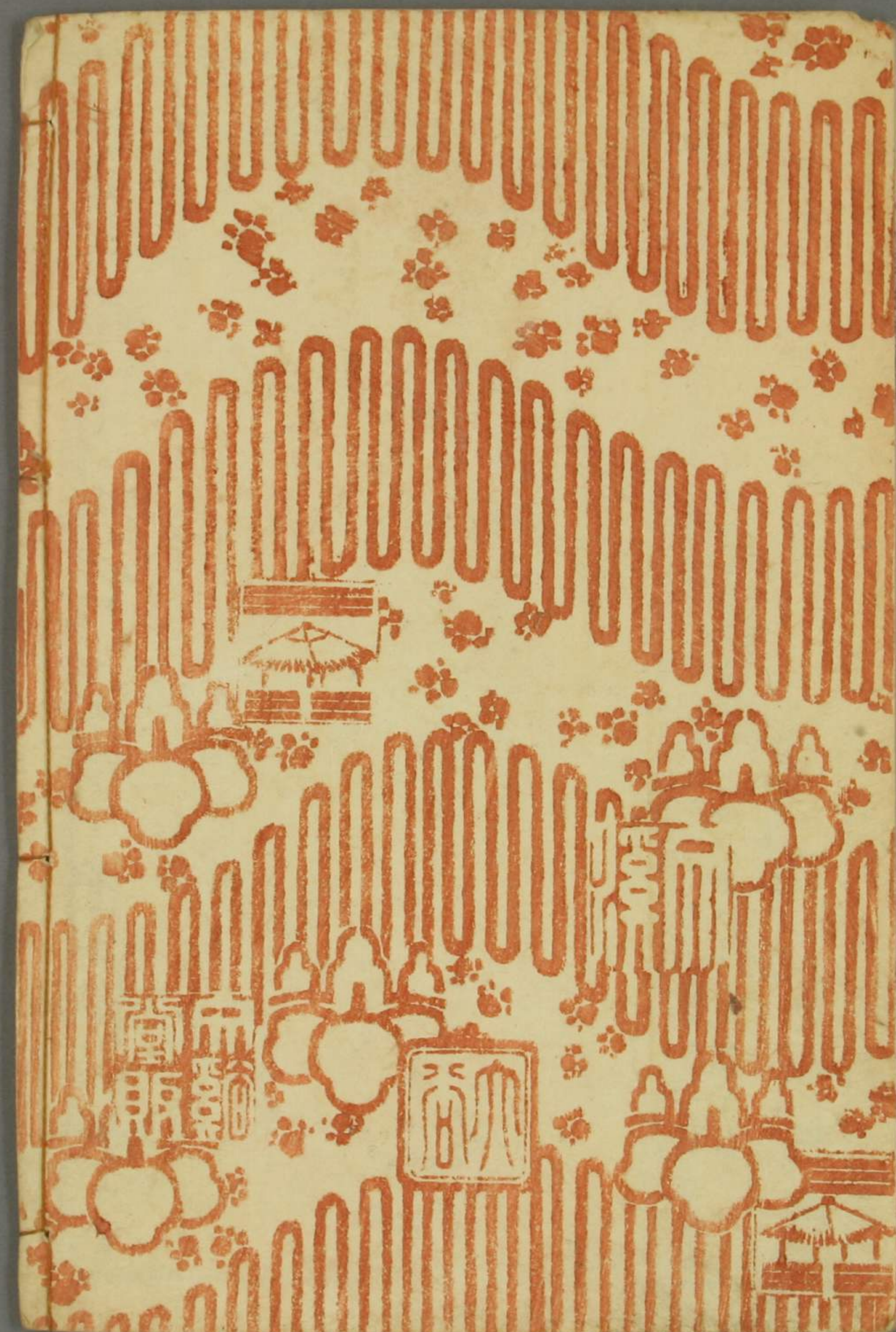
そらそそそ  
二天士の  
くび  
あひふ

えあのめあうおせうまごさぎだめそよさよさとさみせえ偽ぎ真んつめさを













一勇斎閑芳画

曲亭長壽著

下冊

特別

~13

4271


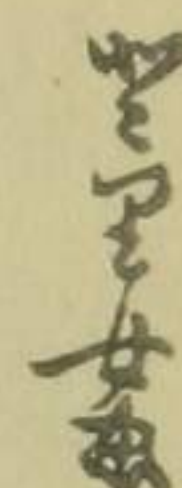
44



うまふくを足つゝふひふあち  
とちとる正ありそ半きぬ  
たろさとしのり  
むじざうち

△あじ  
てきあるうな  
この西のうが君

ぬはるありあはじ山の  
 尺八とこの両刀をつぎ  
 へ年のもじちあや十月  
 あひ原わかたさこのり  
 グ逸東太<sup>がまう</sup>ふらこ  
 ま下をりそのちちとふ  
 らんす<sup>の大小ふこ</sup>尺ちつとも  
 へ年のもじちあや十月  
 あひ原わかたさこのり  
 グ逸東太<sup>がまう</sup>ふらこ  
 ま下をりそのちちとふ  
 らんす<sup>の大小ふこ</sup>尺ちつとも



あな

八  
大  
傳

二十  
五

曲亭

五

著

一  
勇  
新

國芳

為



下冊



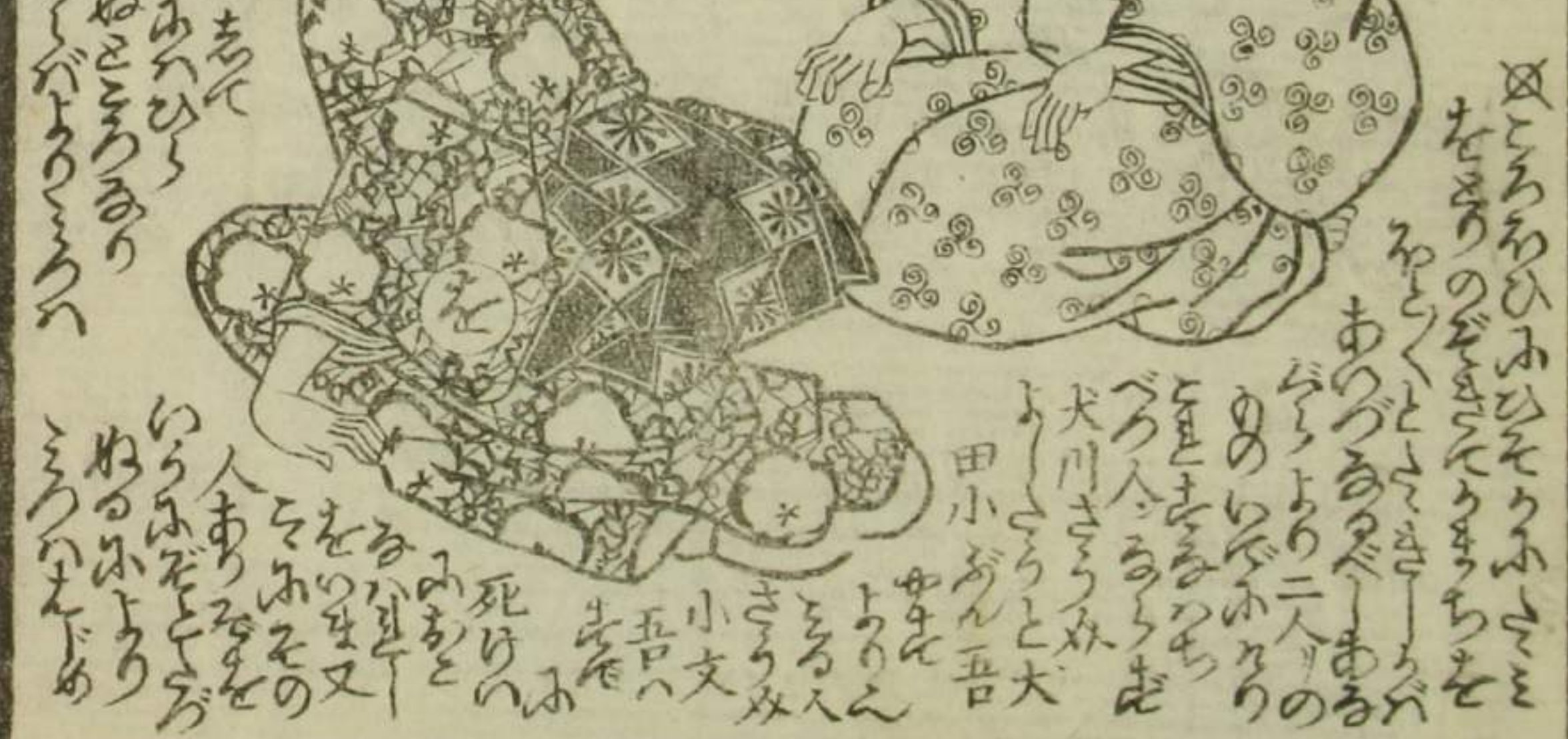


つぎにひさしめたとまてえりそのま  
 そとに十四五とせむらひをあらわす  
 このめいしうをいひてさくふふさう  
 正あまのまふのうて  
 まふのうて  
 西の千葉家  
 さうごんのめい  
 あらまのうて  
 のうて  
 のうて  
 つぎにひさしめたとまてえりそのま  
 そとに十四五とせむらひをあらわす  
 このめいしうをいひてさくふふさう  
 正あまのまふのうて  
 まふのうて  
 西の千葉家  
 さうごんのめい  
 あらまのうて  
 のうて  
 のうて



つぎにひさしめたとまてえりそのま  
 そとに十四五とせむらひをあらわす  
 このめいしうをいひてさくふふさう  
 正あまのまふのうて  
 まふのうて  
 西の千葉家  
 さうごんのめい  
 あらまのうて  
 のうて  
 のうて



[illegible][illegible]























[illegible][illegible]



まうたを斧へかきし  
あさむら刀を丁とのだ  
そうてを

ふさこふさふさ  
をらふふ  
ふさこふさふさ  
をらふふ

ふさこふさふさ  
をらふふ

ふさこふさふさ  
をらふふ

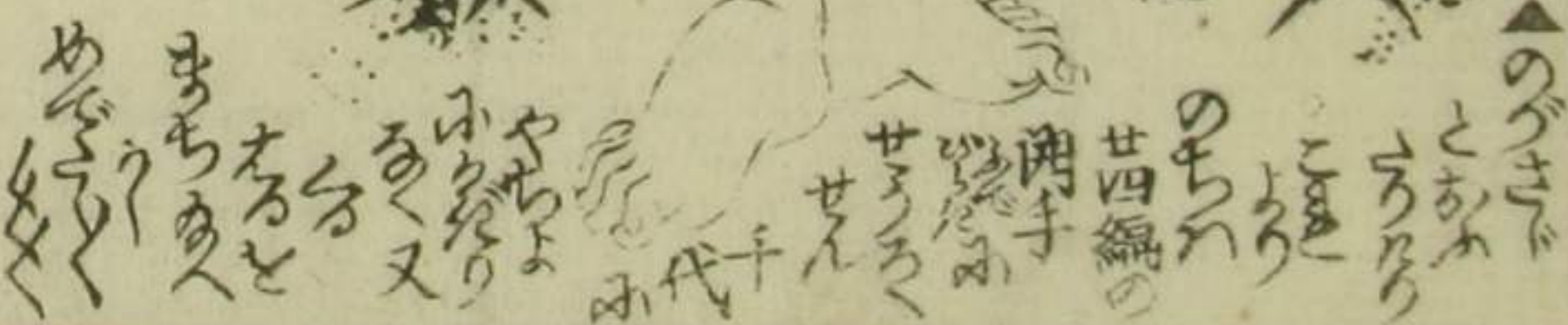


今ある  
 ともあり  
 まうとある  
 ぬきううね  
 うる刀のいさ  
 づまきそひさ  
 うをものとも  
 せざるものへ  
 さあうめうけ  
 あぐせむふ  
 あるなけき  
 なうねあぐ  
 もあらず





家傳神女湯 藥人らるる炭瘡 一包 代 百孔  
 蛇瘡の良藥 此の藥は蛇瘡の良藥なり  
 精製奇應丸 大包代金采巾包代 反券小包五今  
 熊膽黑九子 多くのめけを以て丸起 一包代五今  
 婦人洗兒虫の妙藥 一 一包代六十四孔  
 製藥本家 器倍濃煎所士令東側 瀧澤氏  
 弘處 元坂町中坂下四方の向 乃久氏



琴童抄錄  
國芳圖畫

海晏印 弘治代百銅

朝  
三

一名江戸市川香

晉書

賣弘所  
丁子屋平兵衛

東都

調合所  
鷄舌館製

[illegible]







曲亭琴齋著  
一勇齋國芳画

第二十三編

假名讀本大傳

東都書肆

文溪堂梓

